

## 第5回人間作業モデル全国事例検討会のご案内

これまで各地区の人間作業モデルに関心を持つ方々が集まり、事例検討会を実施してきましたが、2023年3月から全国の方々を対象として人間作業モデルの事例検討会を開催することになりました。今回で5回目です。開催はリモートで実施しますので、どこからでも参加できますので、どうぞご参加下さい。

日時 1月26日(日) 13時～17時

参加費 一般4,400円、賛助会員・学生3,300円、発表者2,200円

発表時間 20分 質疑 30分

ミニレクチャーを予定していましたが、今回は4事例の発表になりましたので、ミニレクチャーは中止します。

参加ご希望の方はホームページの事例検討会からお申し込みください。参加者には当日までに発表のパワーポイントをお送りしますのでご覧いただき、質問をしてください。なお、OT協会のポイントが付きます。

### 【演題 1】

認知症高齢者の日記再開に着眼した、通所リハビリテーションにおける  
作業療法の検討

介護老人保健施設おゆみの  
作業療法士 大門俊貴

80歳代女性で、5年前から通所リハを利用開始。2年前に認知症と診断された。長女と2人暮らしで、4年前から家事や趣味、長年続けてきた日記もつけなくなった。MOHOによるリーズニングの結果、意志と習慣化に問題があると考えた。作業療法では日記再開に着眼し、始めにOTRが作成した日記を用いたが、記入方法の理解を得られず、定着は困難だった。日記の方法を検討し、自宅の日記を見せてもらうと、時間や予定の記入方法に特徴があると分かった。そのため、特徴を反映した日記に変更すると、徐々に1人で日記を記入し、自宅でも行うことができた。また他利用者に「いつもやっているのよ」と話したり、リハビリ開始時に「待っていましたよ」と主体的な行動が増えたりし、意志や習慣化の改善につながった。

## 【演題 2】

### 冠動脈バイパス術後の患者に対し意味のある作業に焦点をあてた介入を行い 健康関連 QOL に改善がみられた事例 ～急性期における MOHO 実践の模索～

社会医療法人 同仁会 耳原総合病院 作業療法士 越智 学

今回、60 歳代男性、冠動脈バイパス術後の患者を担当した。妻、娘と同居。慢性心不全の急性増悪から入院。介入は在院 25 日間の内、13 回であった。患者は術後 ICU 初回介入時からピアノに興味を示した。HCU 転棟後、排泄に介助を要する状態を尊厳が失われたと訴える一方でピアノへの興味を示し続けた。一般病棟転棟後、短距離独歩が可能となったが EQ-5D-5L では「不安/ふさぎ込み」の水準が顕著に低下していた。そこで MOHOST の評価に基づきピアノ演奏に焦点をあて介入を継続した。結果、独歩自立、「不安/ふさぎ込み」の水準、QOL 値ともに向上がみられた。本報告を急性期における MOHO 実践について幅広く意見を頂く機会としたい。なお、ご本人から発表の承諾を口頭で得ている。

## 【演題 3】

### 統合失調症患者の意欲向上と役割再獲得に向けた人間作業モデルの活用

萩病院 平城安澄

事例は、A 氏 50 代後半の統合失調症 (SC) の女性である。OT 活動中、活気は乏しく、疎通不良で、日中前傾姿勢で椅子に座って無為に過ごしており、関節拘縮と下肢筋力の低下のため歩行困難となった。意欲と活動性の向上を目的に絵カード評価表を実施した。主にカラオケと体操が挙げられ、「足が動かなくなったことが一番困っている」と語り、身体リハとカラオケを開始した。5～6 カ月後、身体機能向上後、シルバーカーでの歩行となった。本人の思いを把握するため OSA を実施した。「自宅では自分一人ではできないことがない。何か 1 つでもできることを増やしたい。家事が出来るようになりたい。まずは、洗濯物が出来るようになりたい」と語った。主婦としての役割の獲得を目指しプログラムを再検討し、MOHO による治療戦略を取り入れた結果、本人の意志と身体機能が向上し、役割の再獲得ができた。

#### 【演題 4】

### 介護経験の語りから病識が改善し、服薬支援に繋がった事例

鶴岡協立病院 小野莉奈

心不全にて入院した認知症を持つ独居の80歳代高齢女性(以下、事例)を担当した。認知症により薬の飲み忘れがあったが、自宅へ退院し独居生活の再開を強く希望していた。親戚との関係性は不良のため、支援は望めない。事例は病識が乏しく、薬の飲み忘れを認めず、服薬管理への介入に拒否的であった。事例にナラティブを促すと、心臓弁膜症で亡くなった母親の介護体験を語った。母親と自身を比較することで自己洞察がなされ、心臓を悪くしたことを理解するようになった。その結果、薬物療法の重要性と服薬管理の代償手段導入に納得が得られた。作業質問紙を用いると、起床後に日めくりカレンダーをめくる習慣があることが分かった。病棟でもその習慣を再開すると、日めくりカレンダーを用いて日付の確認が可能であった。そこで新たに、一週間分の薬がセットされた服薬カレンダーを導入したところ、自ら日めくりカレンダーで日付を確認して正しく服用できるようになった。最終的に本人の希望であった自宅へ退院した。在宅サービスを利用して上記の配薬支援を受けることで、自宅でも内服を自立している。退院後1年経過した現在も、心不全に増悪はなく、自宅で独居生活を送っている。